

平成 25 年度 市長・教育長と語る会 議事録

日時 平成 25 年 11 月 1 日 (金) 19:00～

会場 福井市体育館 第 5 会議室

参加者

○福井市

東村新一市長 内田高義教育長 稲津昌昭教育総務副課長 松田新一学校教育課長

丹尾信一保健給食課長 小川敏幸生涯学習室長

<生涯学習室>

岩崎裕美子副課長 佐藤弘幸主任 奥田寛章主査 近藤 巧社会教育指導員

○市 P 連

水島秀晃会長 大澤宏輝副会長 古石三千代副会長 大谷真一副会長 川島泰幸副会

長 宇佐美嘉一副会長 小谷浩永 A ブロック長 長田光広 D ブロック長 丸山裕紀男

E ブロック長 山口由美 F ブロック長 見奈美ひろみ A ブロック女性代表 東郷京子

F ブロック女性代表 上野みずほ総務委員長 佐藤慶子広報委員長 松本友和地域教

育委員長 伊藤昌継学校教育委員長 出蔵稔夫大会実行委員長 佐々木敦子特別委員

長 朝倉富成顧問 刀根朋子事務局員

1 開会のことば・市民憲章唱和 <司会・進行：上野みずほ総務委員長：松本小>

2 挨拶：水島秀晃市 P 連会長

本日は校務ご多忙の中、福井市長 東村新一様、福井市教育長 内田高義様を始め、
沢山の皆様にご臨席賜り、私たち福井市の P T A の代表者と懇談の場を設けていた
だきますこと、心より感謝申し上げます。

今年度、福井市 P T A 連合会では、「子どもたちの笑顔のために！広げよう P T A の
輪！」をスローガンにいじめ問題への取組を始め、学校図書支援、被災地支援とい
った連合会だからこそのことに全力で取組み、その存在意義と使命に向かって邁進
しています。今月の 30 日には、私たち福井市 P T A 連合会として最も重要とする研究
大会を福井商工会議所にて開催します。そこでは、第 1 回いじめ防止標語・親子メッ
セージコンクールの表彰式や「親としてどうあるべきか 尊敬される親とは」をテー
マとして P T A 全員で考えてまいりたいと思っています。このように、今年度の取組
をさらに飛躍・発展させ、充実したものとするためにも、今日のこの語る会におきま
して、福井市の行政・教育の最高責任者と会を持たせていただきますことは本当に意
義深いものと考えております。

わずかな時間ではありますが、親の願い・思いを少しでも共有していただき、それ
が子どもたちへの未来へとつながってまいりますことを切に願います。本日はどうぞ
よろしく願いいたします。

3 ご挨拶：東村新一福井市長

皆様、今晚は。今年度もこのような会合を開かせていただきますこと、誠にありがと

うございます。各地区の学校、また、福井市全体の問題につきましていろいろとお力沿いいただきまして厚く御礼申し上げます。今年の夏も大変暑く、今年で一応クーラーを設置することができ、学校環境を一つよい方に向けられたと安堵しています。耐震・天井の問題、ユニバーサルデザイン、いわゆる障害者の方々にやさしい学校づくりということについてはまだまだと考えております。学校施設の老朽化がすすんできている現在、明道中学校の建て替えを始め、これから先、次々と学校の建て替えを考えていかなければならない現状です。新聞報道でご存じのように、国では、学校教育の在り方、六・三・三や教育委員会のあり方など議論されています。福井市は、教育委員会と行政とはうまく連携がとれているものと思っています。本日もいろいろと議題が出されていますが、教育委員会と行政とが連携・補足しながらすすめていただきます。

4 ご挨拶：内田高義福井市教育長

こんばんは。本日はこのように福井市PTA連合会の皆さまとお話をさせていただきます機会を設けていただき厚く御礼申し上げます。日頃から、PTAの活動として、子どもたちの健やかな成長と幸せを願い、いろいろな行事に取り組んでいただいておりますこと厚く御礼申し上げます。今ほど会長さんから「子どもの笑顔のために」という言葉がありました。私も日頃から言い続けている中に、笑顔の素敵な大人になって欲しいと願っています。笑顔というのは、赤ちゃん時から大人に至るまで、にこっとした顔を見るだけで互いに癒されます。何よりも素敵な笑顔をどのようにして子どもたちに身につけてもらえるのか、学校だけでなく、地域・保護者三者の協力が大切です。子どもたちが触れ合う始めの場面を考えた場合は家庭・地域・学校といういい方をしました。理由は、一番最初に学ぶのは母親からです。家庭の中の社会、小さな単位の家庭から地域へ、そして、学校へと広がっていくものと考えます。学校のよさは、考えながら、計画しながら、計算しながら教育活動を組み立てられています。その点が家庭教育や社会教育とのちがいだと思います。学校は学習指導要領に則って教育活動が計画されているところです。この後のご提言では、道徳や外国語活動の話が出されていますが、その内容は学習指導要領の中に具体的に示されています。せっかくの機会ですので、昨年のように、ざっくばらんに話し合い、教育行政として、子どもの笑顔のためにがんばれるところが頑張ってもらいたいと存じます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

5 出席者の紹介<上野みずほ総務委員長>

6 市P連からの提言についての意見交換

提言1 学校施設・設備の充実と活用について【宇佐美嘉一副会長：棗小中】

子どもたちの学習環境整備につきまして、先ほど市長様から説明いただきましたように、いち早く夏の対策として、全学校に、エアコンを設置していただき、子どもたちが元気に学校をすごせるよう、いち早く対応して下さいましたということ、お礼申

し上げます。また、耐震化対策も進んでいるなかで、災害時には学校施設が利用されることが全国的に多いかと存じます。福井市でもそのような指定となっておりますし、その中でよく、天井落下ということで、その施設が使えないということがあるかと思えます。その取組みについてお聞かせください。また、その発展的な部分で、福井市は太陽光発電の設置を昔の鷹巣荘の近くに工事をすすめています。新エネルギーの利用という観点から、太陽光発電を学校に設置するということが全国でもあると聞いております。そういうことにつきまして、福井市ではどのようにお考えか、できたら子どもたちにもその新エネルギーも含めた活用という考えを持たせるためにも、また非常時に太陽光発電のエネルギーを避難拠点で使う対策として太陽光設置ということをお考えいただけないかご提言させていただきます。

回答 東村新一市長

今、2点ご質問があったと思います。

1点目の太陽光発電の設置についてお答えさせていただきます。ご指摘のように学校は地震があった時の第一次避難所になっています。水害等につきましては基本的に公民館を第一次避難所として使います。大雨などの降水についてはある程度予想ができる部分があります。今回の伊豆大島の例をみていただいてもそうだったと思いますが、台風の動きがどうだとか前線の動きがどうだとか、そういうある程度の想定ができるものでできるだけ我々としても避難勧告や避難指示というものを早いうちに出したいとは思っているのですが、やはり思わぬコースをとった場合に夜になって発令することもあります。そんな時にもできるだけ明るいうちに避難準備放送させていただいたりということになると、場合によっては自主避難をされる方もいることもあって、まずは公民館をとということになります。地震の場合ですと、いつ何どき来るか分かりませんし、来ますと一時に多くの方が被災をするということにもなるので公民館では数が賅えないので、学校を基本ベースに使わせていただくことになります。また、現在、避難所について、問題点の洗い出しをしています。学校の裏側が山になっていて崩れるのではないかという場所がないわけでもない、そういった場所はこういったところに変えるのかという精査をしているところです。このように、学校や公民館を使うこともあるので、だいたい学校のところに防災備蓄倉庫あるいは非常用貯水装置、あと最近は下水が入っているところでないといけないのですが、災害用のマンホールの設置などを進めております。この防災備蓄倉庫には各学校に発電機を1台設置しました。だいたいポンペを60本含めて行っていますので、2缶で1時間ぐらい発電ができます。太陽光発電の場合については、本郷小学校、至民中学校、安居中学校、中藤小学校に、越廼中学校にも付けております。また、明道中学校にも付ける予定をしています。これからの学校は新しく建て替えたりしたところです。そういう場合に太陽光発電を設置ということです。ここの体育館もそうですが、この体育館ですと3分の1くらいの電気が太陽光発電で賅われるかどうかということでもまだまだ太陽光で十分なエネルギーを賅えるまでは至っていません。そういうような状況の太陽光発電です。他の学校の建て替えを考えていかなければならないのですが、福井の場合、学校は大雪を考慮して2mの積雪には耐えられるようになっています。そこに太陽光発電を設置となる

と、この太陽光の部分が重くなってしまうこととなります。まだ設置という格好に行かれないということです。越廼中学校については、屋上ではなく空き地に設置できました。できるだけ、新しく建てる施設には太陽光ということですが、既存の学校については今みたいな心配もありますので、すぐに入れられないというのが状況です。新聞で、小中学校に太陽光発電を設置している記事がでていましたが、それは蓄電池を備えてないと災害時には対応が取れません。が、そういうように整備をしきれている学校が少なく、非常用電源としてはまだ使えることが少ないということが新聞にも出ていました。そういう課題も残っているということです。

もう一つは、天井の部分ですが、天井材、照明器具、吊り上げバスケットボールということで、この部分に問題があるということです。天井材については基本的に撤去、照明器具についてはワイヤー導入落下防止、吊り上げバスケットボールについても撤去または落下防止策を、それぞれ課題がある学校については対応策を定めています。先ほど申し上げたように、耐震補強のあるところは耐震と併せてやりますし、課題のあるところについてはフレキシブルに対応を取らせていただくということで、耐震工事が終わる平成 27 年度末までには終わらせる予定をしています。

提言 2 いじめへの対応と道徳教育の取組について

【佐々木敦子特別委員長：福井大附属中】

昨今いじめに関して自らの命を絶つという痛ましいことが報じられております。文化庁の調査によりますと、年間 200 名の児童がいじめによる自殺で命を絶っております。実際には警察庁の調査では、亡くなった遺族からいじめによる自殺と申し出があったのが毎年年間 600 名～800 名と発表されております。この子たちがどんなにつらい思いで命を絶ったかと思うと胸が締め付けられます。私たちの大切な子どもたちを護るために各 PTA ではいじめ防止映画上映会、いじめ防止コンサートなどさまざまな取り組みをしています。これまでいじめはないもの、あつてはいけないものとされてきましたが、今は、いじめはどの学校にもあるものだと考えられるようになりました。今後、いじめに関してどのような対応をお考えでしょうか。また、いじめ問題を防止するためにも道徳を学ぶ時間を充実できないかと考えますが、道徳教育の現状と課題についてお聞かせください。

回答 内田高義教育長

まず、いじめの防止ということですが、福井市では、平成 22 年にいじめの対応マニュアルを作成し、昨年、問題行動等の対応マニュアル、いじめだけではなくいろんな暴力行為等、非行等を含めたすべて問題行動という形の中で対応マニュアルを各学校で作成し 4 月には提出してもらっています。その中で、いじめに特化しますと、いじめは許される行為ではないということをまず抑え、その前にどの子にもどのクラスにもどの学校にも起こりうるということを校長はじめ教職員がまず理解し、もし、いじめが出てきたときにはいじめられている子を学校はちゃんと守ってるよということを子どもたちに分かるように子どもを安心させるということが基本的にあります。そういう中で具体的な取り組みとして次の 3 点あります。①未然防止に向けた取り組み、②いじめの早期発見に向けた取り組み、③いじめの発覚した時の対応の 3 点です。この 3 点は国がいじめの対策防止を出していま

すが、この3点については、きちんと、福井では対応がなされています。では、実際の場で機能しているのが次の課題になってきます。学校の中でそういったケースが出てきたときには職員以外に学校にはスクールカウンセラー、教育相談の担当者、場合によっては、スクールソーシャルワーカーが対応しています。学校の対応は、子どもへの対応、保護者への対応を含めて、我々が学校に通っていた頃よりも広がっています。子どもたちの中には、先生とは話がしにくいけれども、保健の先生とかスクールカウンセラーの方には話がしやすいということもあります。いろんなケースに対応していますが、最終的には保護者、その子どもの信頼関係がきちっと取れてないと逆に問題解決が長引いたり、違う方向にいつてしまったりすることもあります。保護者も学校との話の中で、子どものためにという方向が同じで共感が得られればよい方向にいくのですが、そうでないとあの校長に言っても話にならないとか、あの先生に言っても分かってもらえないとか、そうなってくると教育委員会の方に連絡が入ってきます。そういう状況になると、教育委員会では、生徒指導の担当とか指導主事とか、場合によっては課長が間に入って、話し合いを設けています。このような話し合いを設けることで理解し、問題行動やいじめも含めて解決することが多いです。親と学校との信頼関係が築かれていけばいいのですが、一番我々として困るのは、例えば、NPO 何々団体とか、いじめの何々とか、そういうところに相談をされてしまうことです。そういった第三者側から入ってくると、事実関係がつかみにくくなったり、確かな情報を話してもらえず、謎掛けみたいに言われてそれを調べるのが学校ではないですかというようになかなか難しくなる場合があります。このいじめ問題では、「いじめている・いじめられている」という構図はわかりやすいのですが、それは全体のわずかです。ほとんどは遊びの中でいじめにあっている、時にはいじめられている子がいじめっ子になるというように、力関係が変化していく。事実がどうであったかということ突き詰めていくと果たしてその子が本当に将来育っていくのかとか、その事実はそうであっても保護者とそのまわりと話をしておブラートに包んだほうがいいんじゃないか、全て白黒はっきりさせようと、いろいろ相談される人の中で、一つ多いのは白黒はっきりさせる。ホントはある程度歩み寄れるだが裁判に訴えてでもはっきりさせてくれ、でも、子どもはどう思っているのか、子どものためになるのかなど、そのあたりが学校現場で校長らが悩む点です。そういうところで、信頼関係が構築していけばいいのですが、学校側も話が難しいければ、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの方に入ったり、教育委員会が入ったりして取り組んでいるのが今日の状況です。

次に、道徳教育ですね。案外、道徳の時間は、1週間に1時間しかありませんので、そこでしか道徳は教えていないイメージが持たれておられるように思います。1週間に1時間、35週、年間学校の授業日数はだいたい200日です。その中で、国語やら数学やら英語やら授業時間が6時間やら5時間やら実施されていますが、そういう中で道徳は1時間です。学習指導要項には、道徳は道徳の時間だけではなく、学校の教育活動全体の中で実施してくださいと示されています。体育の授業においても、チームを作ったりいろんな活動の中で思いやりとかも養っていきます。道徳って何かというと、いろいろな心を道徳の時間にもう一度見つめ直すとか、また、こういうことはだめなんだということを子どもたちが再確認するという捉え方も一つできるのではないかなと思います。道徳に時間に教えてもらったことを他へ励行、役立つようにするという考えもありますが、実際、学校生活すべて

の中で道徳を行うというのは友だちの中でトラぶったり修学旅行やら遠足の班決めの際に子どもたちがトラぶったりそういったことを何であの時トラぶったんだろうかということや道徳の時間に振り返る場になるのではないのでしょうか。そういうことで、道徳の時間は1週間に1回しかありませんが、道徳的な内容は学校教育全ての活動の中で行っていると理解いただければと思っています。今ちょうど教育ウィークで、だいたい来週ぐらいから始まる場所もあります。授業参観であえて道徳を行う学校も最近多くなっています。PTAと一緒に父さんお母さん来られた時に道徳を行い、子どもが産まれた時の手紙を書いたりなどして、そんなことを題材にして命の大切さとか、自分も大事にできなかったら友だちも大事にできない、そういったことから自己肯定観を育てていくというように、PTAも一緒に育てていくという状況だと思っています。また、お気付きの件がありましたら、お教えいただければありがたいと思います。

東村新一市長：

道徳は我々が子どものときには道徳を習いました。狼少年の話聞かせてもらいながら嘘をつくとも誰も信じてくれなくなるよという話などを聞かせてもらったものです。子どもの発達に合わせて、どういう題材に合わせるかということが大事ですが、それを言う大人がしっかり規範に合った行動をしていていけば子どもたちも分かってくれるのですが、ニュースなどを観れば大人が行っていないことを子どもだけに押しつけるのかと。これでは子どもが道徳を習っても活用していけないと思います。今月末にある研究大会ではどういう大人にならなければならないかという話もあるとお聞きしています。正にそこが基本なのではないかと思っています。

提言3 教師の多忙化解消と学校週6日制の取組について

【川島泰幸副会長：大東中学校】

昨今、さまざまなコミュニケーションツールの発達やインターフェイスの発達によって社会全体で人間関係が希薄になっているなかにおいて、学校においては先生が子どもたちと向き合う時間を大切にしてほしい、子どもたちを直接みてほしいという気持ちを保護者として持っています。先生方は忙しくて大変という話をするのですが、確かに拝見している限り非常に忙しそうにされています。先ほど、教育長が言われたようにサポーターですとかスクールカウンセラーも各学校に配置されていますので、その協力も得ながら先生方も頑張っているのだと思いますが、何故に先生方がそこまで忙しいのかと若干の疑問があります。私の子どもの頃は40人学級で各学年5つか6つのクラスがありました。今だと30人学級でクラスの数も半分くらいに減っています。教師の数も減っていますので楽になったというわけではないのですが、先生方自身が非常に忙しいと感じている実態をどのように考えておられるのか、どういった取り組みをしているのかということもまずお聞かせください。

最近、学校教育に関してさまざまな議論がなされる中で、学校6日制についてメディアなどを通して見ます。確定した話ではないとしても福井では2学期制とか他の市町村とは違う取組をされている中で、学校6日制についてはどのようにお考えなのか現時点でのお考えをお聞かせいただければと思います。

回答 内田高義教育長：

我々の学生時代を思い出していただくと先生来ない時もありました。自習とか。この自習ができるのが良いクラスだなんて。先生来ない時も結構一生懸命取り組んでいましたね。遊んでいる子もいましたけど、先生のスリッパの音を聞いたら急にシーンとなって。今は自習ということはほとんどないですね。代わりに先生が授業をする形になっています。自習であっても、今度は監督責任、子どもだけで活動していて何かあったときにどうなるんやと必ず問われます。部活動も同じです。昔は生徒だけで走っていて、もう終わったかと。職員室行くと先生は違う仕事をしながら、では来てくださいと。今はそれができません。子どもが活動しているときはきちんと危なくないように。そういう状況というのは先生方は多忙感というのか、それはどうしてかという、我々の仕事の素晴らしさでもあるのですが、人を育てるといふのと品物作るとでは全然違います。国の政策をやってきて人を育てるのにはたしてどうであろうかと思うことはたくさんありますね。人を育てる中で先生方は、福井の先生方は特に真面目目という表現がどうかと思いますが、子どものためになることであれば、少し時間かかってでも勤務時間終わってでも家庭訪問したりしています。これが我々は普通だと思いますが、他から見たときになんで勤務時間終わってもそんなことしないといけないの、とか県外から来た人が感じることもあると聞きます。なんでこんなに宿題が多い、いや普通でないかな、と我々は思っていますが、でも、福井来た人が半年1年たつと、福井っていいところですね。夏休みとかで、学校で学習会をしてくれます。都会では勉強したかったら塾へ行ってくださいと言われる。学校は子どもを守っていてくれればいい、勉強は塾でさせますから、と。そういった学校と同じように福井の学校も見られているとすれば、国の政策が出てきたとすれば、それは福井にはあてはまらない気がする。一方でそんな時間まで頑張っている先生がいい先生かといえ、それは今の時代ちょっと違うだろうと。自分の家庭もしっかりとせなあかんし。そういう先生がいいとされた時代もあった。しかし、みんな学校を5時なら5時で帰って子どもに何かあって学校電話したら誰もいないと。それではダメではないかなと。部活が6時くらいで終わったら、せめて30分～1時間学校にいて対応できないと、保護者が不安になるでしょう。そういう願いはします。ただ、労働基準法の上で、帰りますと言われるそれまでです。福井の教育風土というのは、子どものために塾に行かなくても学校でちゃんと勉強すれば高校に入れると、そのために、冬休みの補習なども実施するということで、保護者との信頼関係を築いてきた。白黒はっきりさせるとか、塾行かせないのかとか言われてしまうとつらいですね、そうじゃない。一緒になって子どもを福井の宝、国の宝ですから同じ方向を向いて行っていかなければならない。静かに自習できるクラスを作ろうと、みんなが思っている、価値観がこれだけ多様化してくると、どうしてこんなに暑いのに帽子をかぶらないといけないのか、と言われる親もいます。逆に、自由にすると、何故かぶらせないのかと、どっちも意見としてある。今はどれもそれぞれの正しい部分があって価値観が多様化になってきたということです。では、学校は、地域・保護者の代表の方をメンバーにした地域・学校協議会という場を設けて、PTAや地区の人のご意見も聴いて行っています。地域・学校協議会のメンバーが学校を見て、地区の学校はどうやこうやとやればいんでないんかと意見をもらいながら、どのようにして子どもの学力や体

力をつけていくのか、校長は学校の経営者として、4月にスクールプランを提出します。そういったことを共通理解しながら、PTAも協力していくことになります。ただ、意思疎通が必要であり、いろいろな場所・場面場面で、保護者・学校・地域が共通理解しながら、統一した方向で行っていただけるとありがたいです。こちらに苦情入ってくるのは、そのあたりで地区の文化・風土とかがあって、そういうことを分かりながら先生らと正しい方向で歩いていくと、子どもたちも安定するし親も安心します。

6日制に関してはどのようにお考えですか？

内田教育長：

これ逆にどう思いますか。どういうふうに6日制を理解しておられるのか。土曜日を6日制にするというのは、振替なしです。土曜日にPTAの活動とか体育祭とかを行って月曜日に振替しています。これは、正式な6日制とは違います。今の状況の中で、土曜日を授業にします、振替はありませんよ、このときに子どもがいちばん困るだろう。どうしてかということ、子どもの中で土曜日に何をしているのが多いかということ、小学校の高学年くらいになるとスポーツ少年の活動に行っている人がたくさんいますね。地区の行事にお年寄りが集まって盛り上がっていたのが、最近、年寄りも参加が少なくなってきた。孫の試合があってそっち行ってしまう。なるほど、でもダメって言えない、でも地域のことも大事。家族でディズニーランドの計画をしているので行けないとか、そういう価値観が出てきている中で、今、土曜日を復活させてやろうとすると、いろいろなことを解決しなければならない問題が出てきます。多くは授業日数の確保という問題が出てきます。福井市の場合、2学期制にしたのは授業時数の確保ができるということです。2学期制だと始業式と終業式の少なくなったその分授業ができます。もう一つは、夏休みを休みではないという認識。1学期の途中で、10月の第2週までは1学期です。そういう中で、夏休みに子どもたちを集めて学習会をしています。それでも、学習の流れの中で遅れているところがあったら学習会を行っています。これも難しいのはやっている子は来なくてもいいわけで、宿題をしていない子らを集めて先生は学習会を行っています。でも、その子たちだけ来ると自分らはできないからと思っても具合が悪いので、強制はしないけれど参加してねと、でも、貴方は来てねと言ってやっているところが多いです。学習会や放課後の学習も含めて、福井市の学校の場合、授業時数は足りています。授業時数の確保ということを主眼において、6日制を取り入れている都会はあります。2学期制を行っているところは、福井市と敦賀市とあわら市の中学校だけで、あとはまだ3学期制です。2学期制になって5年ほど経ちます。今慣れてきたところでもあり、せめて10年ほど行いたいと考えています。実際、全国的に6日制を行っているところは数%です。土曜日にいろいろな活動・行事を福井は行っている現状ですので、今まで通り。ただ、本当の学校6日制ではない。それは振替があるので。土曜日を使っているところが多いです。

提言4 今後の外国語（英語）教育の取組について 【古石三千代副会長：社西小】

昨年の語る会において、外国語教育の現状にお話をいただきました。小学校の外国語教

育は中学校からいきなり英語の勉強がスタートしていく。しかも、学ぶということに重きをおいて、書くこと・聴くことというような英語を中心としたものための英語教育の滑走路というカスミーズに入っていくための助走路として小学校の外国語教育があるのだということを伺っています。再度どのような視点をもって取り組もうとされているのかお聞きします。英語に慣れるということであれば、英語の歌を聴いたり、簡単な言葉を学ぶというのも一つあると思います。英語に慣れるというのは、英語の文化圏に慣れるのであればグローバルな考えを学ぶというのもいいと思います。先日、文化庁から英語教育を前倒して小学校3年生から始めますということですが、大丈夫なんだろうかと、ただこれから2020年にオリンピックが開催されるということ、国際化に向けて英語を勉強しなければいけないんだなということを考えますと、これから英語教育というものが重要になってくるものと思います。先生方もただでさえ忙しいところに負荷がかかる、それから生きた英語を学ぶのであれば外国人の講師の方、日本人でも英語を現地に行ってお勉強された方、言葉でなくてそのバックグラウンドも学ばれた方に実際教育してもらおうというのがいちばんいい形でないのかなと思います。外国人の教師の方が少ないので毎週毎週というわけにもいかないとしても、いろんなメディアを通じてできますので、外国語ともしっかりと身近に接する教育の在り方ですが、どのように取り組まれておられるのかお聞かせいただければと存じます。

回答 内田高義教育長：

去年、話をさせてもらったのと内容が政府がこれだけ方針を変えてくるのかと、正直な気持ちです。慣れ親しむということは、身に付いたということよりも定着を図るということをおぼろげに思っていますよ、慣れ親しむということですから。これが、前倒して3、4年になると、時間増やして英語嫌いになったらどうするのだろうと。そうならないようにしないといけないのですけど。この政策・方針を出すときに、もうちょっと先にしないといけないことがあるのではないかと。英語の先生をどうするのか。中学校は英語の免許を持っている先生がいないと教えられない。社会の先生が社会の免許で英語を教えるわけにはいかない。小学校は小学校免許なので、ただ専門が体育であったり音楽であったりあるわけで。ただ今も英語の勉強になると英語の免許が必要になってくる、そのあたりはどう考えるのかなと。今英語についてはグローバル化やらオリンピックのことも国もそういうことを含めてさらにやってくると思います。今、福井では6人のALTがいて、今年9月に1名増えて7人になります。アメリカから改新交流に対し、前まではフラトン市から来ていたのですが2名、今年はフラトン会議があって来ていますが、市との文化交流として、その人たちが3・4年生を見ています。今、7名となったことで、今2週間に1回来てもらっていたALTが、もうちょっと増えて、毎週に近くなっています。福井に来てもらっているALTの方は、子どものために、愉しんで英語をやろうというのが伝わってくるので、よいALTを配置できたなと思っています。その点は、松田課長が英語科ですので、十分理解していると思います。市長がニューブランズウィック市に行かれた時に文化交流を約束されてきたということで、そのあたりをまた話してください。

東村新一市長：

英語の話になると私もできないものですからお話することが難しいのですが、去年も申し上げたかもしれませんが、我々が子どもの頃は英語を話す人を身近に感じることはなかったですね。じゃあ、今そういった機会が増えたかなっていうと普段生活しているうえでそんなに増えていません。ただ子どもたちは小学校、中学校、高校って進んで大学に行って職業につくということになると、その段階から外国へ行ってくれという企業に就職することもあるんですね。世界観が我々が子どもだったころと大きく変わっているということが大きくあります。当然勉強ということになると、好き嫌いがありますから早くやり出したから上手になるかということもそういうことでもないで、そこが難しいと思いますが、親御さんが同じような考えに基づいて理解して進むということは大切だと思います。今の小学校の英語については、中学校から習い出すようなそういう英語ではなくして、我々は **This is a pen** から始まったのですがそれもそれは今では変わっているのですが。いずれにしても外国の方と話をして伝わったと、あるいは外国の人の話を聞いて分かったという、これが喜びにもなるし勉強する上の基礎でないかなーと思うんですね。いわゆる勉強というのに入る前にそういったものが成り立つようにしてあげなくちゃならない。中学校から英語の勉強になりますが、小学校でもわかるようにしてあげる、それよりも前倒して授業にしたらどうだと議論されている訳ですけども、そうなったら我々ももう少し前のところで幼稚園の段階から慣れ親しむ、コミュニケーションの喜びを感じてもらおうということを手伝ってあげなければいけないのかなと思います。福井ではそんなにたくさんの外国から来られた方がそこらにおられる訳ではないので、やはり ALT で採用しないと福井にいてくれないということなんです。基本的に ALT は国全体で採用して福井に行きなさいとなるわけですけども、福井市は、幸いにして、アメリカのフラトン市とニューブランズウィック市という2つ姉妹都市を持っています。3年前、フラトン市に寄せていただいた時ですが、この話は相手の方・フラトン市から出てきたのですが、フラトンの大学で日本語を勉強している人がいるのだが、その人たちが日本へ行って日本の様子を見て日本語の勉強をさらにする、その子たちをうまく使ってくれば英語も教えることができるという話もあって、それで2人来ていただきました。2年ほどたつと故郷が恋しくなって帰るということで新たに5人の方をお願いしています。1人しか来てくれないので、1人は ALT の OB をお願いしています。今度はこちらの方からニューブランズウィック市に投げかけをして選考作業をしてもらうようお願いをしました。大学の学生とも話をさせていただいたんですけども、福井は原子力発電がいちばん多いところですよーとかいろんなことも言われているのでどれだけ来てくれるのかも分かりませんが、向こうの市長にもお願いして、ニューブランズウィック市の土地のことも話してもらって、英語も教えてもらって、自分たちは日本の風習なりを学べる1石3丁の事業ですので、よろしくお願ひしますと話をしました。できるだけ、何かの格好で何かの方法で福井に英語を話せる外国人の方にたくさん来ていただくことが重要だと思っています。皆さんもお勤めの企業で外国との取引とかがありましたら、そういうような格好で、是非、福井の方で勤めてくれないかとすすめていただくとか、また、そういうふうには福井で生活をしている英語圏の方がいらっしゃるといことが、また、その方が子どもがおられれば、その中で子ども同士が話をするきっかけが増えてくると思います。そういうことで、コミュニケーションが取れる。やはり話が通じない方に話が通じたということが英語が好きになっていく基本でないかなーと思っています。

松田学校教育課長：

全くそのとおりです。やはり英語が通じたときの喜びでして、大きなきっかけかなと思います。あと ALT がいない時に関して、小学校での外国語活動を行っていくときに国からハローフレンドというテキストがあります。大きなモニター画面にそれを提示して行っておられるというのがあります。それがいないときにパソコンを使って行うという状況であります。

提言 5 特別支援へのサポート体制について

【大谷真一副会長：上文殊小学校】

障害のある子どもの就学基準が9月に改定され、本人や保護者の意向を一層重視し、より地域の普通学校へ通いやすくする内容であると聞いています。障害者も健常者も分け隔てなく学ぶ「インクルーシブ（包括的）教育」の重視が叫ばれていますが、学校現場の人的・設備整備面などからのサポート体制の現状をお聞かせください。

回答 内田高義教育長：

そういう方向で動いています。福井市の場合はずでにそういった形で保護者が望めば保護者の希望にそって、通常の学級でみてあげるということを考えて、実際そうなっています。夏休みに今まで就学指導委員会という名で行っていましたが、福井市の教育支援委員会という教育支援という形で、これはもう全てのことに對してのことで、障害ということ自体がおかしいことであって全ての子に対する教育支援ということで夏休みに開いています。その委員会は、医師2名、教師が21名、福祉関係の職員3名、関係機関を含めて、約28人ほどで構成されています。通常学級が又は特別支援学級がいいんじゃないですかと。福井は2つ、知的な遅れのある子に対する学級と情緒不安定な子の学級の2つです。保護者にどうでしょうかねと。判定としては、今までは、保護者には養護学校はどうでしょうかと、より手厚く見てもらえますので。保護者の方ではわかったと言われて行く保護者の方もありますし、普通の学校の特別支援学級の方でどうかという方もおいでです。今年は重いお子さんで養護学校の方がよいと判断し、話をされましたが、4人とものお子様は肢体不自由等も含めて、保護者がどうしてもみんなと一緒に学ばせたい。そうすると、どうしてもですね、車いすで階段をあがれる設備をしたり、トイレ改築したりして、そういう子にも対応できるようにしています。今4人いますが、そのうち、一人は痰が絡んだりしているため、介助員が観ています。その人は看護師の資格が必要ですので、午前・午後に分けて対応しています。そういったことを福井では取り入れています。ただ、法的な話になってくると、まだ今後増える可能性はあります。今、特別支援の学級も数が増えて来ました。今年度も福井市で小学校50校中34校に特別支援の学級があります。49学級で165人の児童が特別支援学級で学んでいます。中学校は20校中17校に特別支援学級が設置されて、このうち25学級で81名学んでいます。そういった形で、そのお子さんによっては特別支援学級に入っているのだけでも、教科によってはみんなと一緒にというように、その子の障害の程度に合わせてみんなと一緒にできることはしているという状況です。もう一つは、特別支援学級に入らないで、通常学級ではちょっともう手がかかるという場合は

通級指導の先生を配置しています。あとは県の方で対応しているのですが、あとは市の支援員という形で、この支援員も介助員も市の方でお金を払っています。それと小学校にスクールカウンセラーを配置しています、これも市のお金です。中学校は県のお金でやっています。また、通常学級の中で手がかかる子に対して、低学年のサポーター支援員を65名、福井市でお金を払って市の支援員です。今、学校に行かれますと、どの先生が本当の先生でどの先生が講師で、でも、みんな学校ではみんな先生と見られるので、そういう立ち振る舞いするように、校長先生はじめ指導をしているところです。今の学校は本当にかんりの先生が学級に入って指導されていますが、それで十分かと言われると今のインクルーシブが導入された場合、一人一人につかないといけない子まで入ってきますので、どういう形がいいのかっていうことを国と併せて施策の中で考えています。問題は特別支援の免許をもった先生の確保です。いろんな一つのことを進めていくと、かなりの課題が出て来ます。そういった現状も合わせながら、最終的には子どもにとってどうしてあげるのがいいのかと。だから、保護者も特別支援の学校の方で専門的にみてほしい場合は特別支援の方に行かれるし、小学校の期間は、地区でみてほしい場合やその後、変わるかも知れないというように、既に福井市では実施させてもらっているというのが実状です。

提言6 学校給食における食物アレルギー等を有する児童生徒への対応について

【大澤宏輝副会長：松本小】

私たちの子どもの頃は、食物アレルギーということはあまり聞かなかったのですが、最近、いろいろなアレルギーがあることを聞いています。昨年、食物アレルギーを有している児童が学校給食終了後亡くなるという事故が起りましたが、福井市でも起こる可能性があると思います。学校では、年度始めに子ども一人一人の発育及び健康状態を把握するために、保健調査を行い、日々注意されていると思いますが、学校現場では児童生徒一人ひとりのアレルギーの状況をどのように把握されておられますか。また、食物アレルギーを有する児童生徒等への対応並びに実際事故が生じた場合の対処方法など、お聞かせ下さい。

回答 丹尾信一保健給食課長

アレルギー対応ということで、昨年、弁当ですか、あれはチジミですね。アレルギー対応をしたものを出したのですが、おかわりをしたわけです。チジミが入ったままであったということが昨年発生しています。前々から、市では、学校給食でのアレルギー対応をしているところです。昨年の事故を受け、市教育委員会の対応としては、全部の学校におきまして、アレルギー疾患をもつ児童生徒への一環した対応をすみやかに行うことができるように、今年度4月に市内統一した対応マニュアルを作成し、全校に周知したところです。これは学校給食だけでなく、蜂アレルギーとか気管支炎を含めた全体的なマニュアルです。

平常時の対応として、アレルギー疾患をもつ子に対する基本方針や取り組みの手順。また、学校給食によります選択校、センター校。これは、それぞれの学校で調理している学校もあれば、センターから作ったものを持ってくる学校のあるわけですが、それぞれの食物に対するアレルギー疾患をもつ子への基本方針や取り組みの手順。また、万が一、症状が出た場合の対応として、アナヒラシキー発症時の対応、また、エピペン、いわゆるアドレナリン注射です。これがアナドレアキシン発症時に取るべき対応です。エピペンを使

う研修も含めて、基本的にはどの学校でも敏速に統一した対応できるようにしたものです。これが教育委員会としての対応です。学校での対応としては、就学時の健康診断です。4月の入学時の保健調査により、アレルギーの有無、その原因などを学校で把握します。

その情報に基づき、学校では取り組み案を管理職・養護教諭等が作成します。その案に基づいて、保護者と事前に話し合いを行い、個々の学校給食への対応を決めていきます。

次に、学校全体で共有するとともに、各学級で対応をしていきます。具体的な対応としては、毎月、翌月分の給食メニューを保護者の方に事前にお配りし、食べられないものを事前に家庭でチェックしてもらいます。それに基づいて、関係職員に配布・連絡し、確認を行っています。また、その医療機関からの客観的な判断として、医療機関で統一した学校生活管理指導書を作成してもらい、学校給食とかに活用しています。本市では、医師会の好意で、無料で作成していただいています。また、エピペン使用の研修を今後も行ってきたいと考えています。

東村市長

まずは、親御さんが自分の子どもがどんなアレルギーをもっているか理解していただかないといけない。親御さんも知らないアレルギーのことを学校でやれと言われても学校ではできない。まず、保護者がふだんの生活で、じんましんがでたとかどんなアレルギーがあるかを把握してもらわないといけない。学校に提出してもらおう学校とのやりとりでも出てこない、学校に理解して欲しいと言っても学校の方でも難しいところがあります。

6 フリートーク

内田教育長

何かアレルギーのことで質問とかありませんか。皆さんの中で、給食の対応とかで困っていることはありませんか。

小谷宏永ブロック長より

・親が我が子のアレルギーについて認識していることは大切です。食物について、常に学校側、養護の先生、栄養士の先生、担任の先生、管理職の先生と常に話し合いをしています。

内田教育長

・事故につながらないように対応をさせていただいています。突然性アレルギーというものもありますね。

東村市長

・突然性アレルギーとか蜂アレルギーとかはなかなか保護者もわからないことがあると思います。即座に医者に連れていくことが必要であるが、アレルギーを持っている子と持っていない子とでは対応の取り方が違ってくると思います。なかなかそこまでになると、親が知らないことは誰も知らないことになります。過大に学校に期待をかけられても学校も対応がとれないと思いますので、一線入るべきところだと思います。

小谷浩永ブロック長

・ハウスダストアレルギーということもあります。給食後、具合が悪くなり、そのとき、食物アレルギーではないですかと言われ、学校給食のメニューも調べていただきました。その後、病院でハウスダストのアレルギーと診断されました。

宇佐美嘉一副会長

・自然豊かな地域ですが、虫が多いわけです。学校にはたぶん網戸がないと思いますが、カメ虫とか蜂が多かったりしています。田舎の学校では虫問題が出てきているように聞いています。虫発生時の対応を考えていただけたらと思います。

佐々木敦子特別委員長

・PTA 会費で網戸を付けました。

東村市長

・今、いろいろなことが言われています。除雪機を購入して欲しいとか。学校によって、PTA の方で対応していただいているところもあります。地域性のある要望はどうしても後になってしまいます。優先順位としては、全学校が同じような問題を抱えている方が優先順位が先になります。クーラーとか、トイレの洋式化などです。

7 閉会の挨拶<古石三千代副会長>

本日は校務大変お忙しいなか、長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。それぞれの提言につきまして、丁寧なご回答をいただきまして、なかなかこういう場でないとお聞きすることができないわけで、貴重な時間になりました。今、子どもたちを取り巻く環境は非常に複雑化しています。それに対する対応も専門性、柔軟性、スピード感が問われています。昔、私たちが子どもだった頃とは違って、市の会合に出させていただいていますが、その中で、親がもうちょっとというところに最終的な答えが行き着くことがあります。これから、私たち保護者が保護者としてきちんとやるべきことを行った上で、PTAとしてやれること、行政としてやっていただけることをしっかり見ていかないといけない時代になってきたのではないかと思います。福井の子どもたち、クーラーの利いた教室で快適に授業に取り組める、また、今日いろいろな話を聞かせていただき、非常に恵まれた環境の中で学習に取り組ませていただいていますことよくわかりました。これからもより一層の行政のご支援をお願いしたいと思います。本日は長時間ありがとうございました。是非、来年もこのような会合を開かせていただけたらと思います。どうもありがとうございました。